



























今あるこの世界は泥で出来ていたのか。至極当たり前のよう

いの記より妙に納得かいく。文字通りの泥臭さが真実味を増す。土は全てのはじまりを予感させる。何者も土から生まれたもの食べ、最期は土に帰っていく。最期のあとはまた最初へ戻る。循環の源である。

昔々、世界がまだ水で満たされていた頃。カイツブリという水鳥が深く潜り、辿り着いた水底から一握りの泥を持ち帰った。この泥によって陸地は作られた。アメリカの先住民に伝わる世界創造の神話である。

欲望、全部が合わさつて、火で焼かれ、美しいだけが残つた。

世界に生まれ出た器は泥で出来ていて、その器は世界を有している。やはり世界は泥で出来ていた。泥と世界と器は環を描き、泥の元である土の性質そのままに終わることなく廻り続ける。

泥は成り立たせる力を宿している。しかし、ただ在るだけでは何も起きてない。手が必要である。泥は勇敢な手の持ち主がやつてくるのを、じつと底で待っている。

カイツブリは、どうやつたら少しでも早く水底に辿り着くか知っていた訳ではない。とにかく泥を掴み、戻ってくるのだという一心である。命がけであった。そして世界は作られた。

濱中史朗は自分自身のずっと奥、名付け難い領域へと潜つていく。そこはとても深いから、きっと苦しいだろう。それでも、

泥は成り立たせる力を宿している。しかし、ただ在るだけでは何も起きてない。手が必要である。泥は勇敢な手の持ち主がやつてくるのを、じつと底で待っている。

カイツブリは、どうやつたら少しでも早く水底に辿り着くか知っていた訳ではない。とにかく泥を掴み、戻ってくるのだという一心である。命がけであった。そして世界は作られた。

濱中史朗は自分自身のずっと奥、名付け難い領域へと潜っていく。そこはとても深いから、きっと苦しいだろう。それでも、毎回必ず泥を握りしめて戻ってくる。そして器は作られる。

卷之三

deep-sea diving

diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea
diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving
deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea
diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea
diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea
diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea
diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving deep-sea
diving

deep-sea diving deep-sea diving deep-sea diving
deep-sea diving deep-sea diving

ceramic works:
siro hamanaka

photography:
tadayuki minamoto

text:
chinatsu yamamoto

book design:
osamu saruyama

printing:
houbunsha printing co., ltd.

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced in any form or any means: electronic, mechanical, photocopying, or otherwise, without permission in writing from the publisher.

published by
guillemets layout studio, 2017
<http://guilemets.net/>

© 2017 guillemets layout studio

printed in japan

—引用符書店

alternative white

